

『孫子』における「連続性」信仰と時間認識をめぐって

久富木 成 大

はじめに

- 一 「五時」、「七計」と連続性
 - 二 勝つこと——「勢」への信仰
 - 三 間諜——敵国との連続性の確立
 - 四 戦勝と時間表象
- 注 おわりに

はじめに

『孫子』の書をよむとき、叙述のさまざまな側面において、——この書の性質上、その内容はすべて軍事にかかわってくるのであるが、それらの事象がなんらかの意味で連関し、連続させられているという印象を、強くいだかせられるのである。こうした事情は、なんら異とするに足りないという見方もあるであろう。しかし、そこには見のがしえない、なにもものかがあるように思われてならない。

この書の記述に目立つ、あるいはみで執拗なまでの連続性は、一体

なにに由来するのであろうか。兵書に属するこの書の、このような叙述の仕方によせて、一体、作者は何を主張しようとしているのであろうか。小稿では、このことを明らかにしようとして、第二章では軍事の種々の事象における連続性に言及し、第三章においては、自他の軍における情報の連続性について述べ、第四章ではそれらの連続性のなかにある、ある種の構造的なものについてふれてみたい。

『孫子』は中国古典のなかでは、最もよく読まれている部類に入るのであろう。それにもかかわらず、その本文についてはテキストによって異同が非常に多い。古来多くの考証学者たちの成果もつみ重ねられているのであるが、定本の確立ということからすれば、多くの問題がのこされたままである。小稿では、中華書局香港分局、一九七三年刊の『十一家注孫子』に、本文および注とも、主として依拠した。

『孫子』における『連続性』信仰と時間認識をめぐって（久富木成大）

一 「五時」、「七計」と連続性

孫子は、戦争は国家にとって、他にくらべるもの無い重大なものであるという。その立言の視点は、以下のようなところに注がれている。

○兵とは國の大事、死生の地、存亡の道なり。察せざるべからざるなり。（兵者、國之大事、死生之地、存亡之道、不可不察也）

『孫子』 計篇

ここでいう「死生」と「存亡」とは、それぞれ「民の死生ここに兆（きざ）せば、則ち國の存亡かしこに見（あら）わる」と解する張預の説に明らかである。すなわち、戦争が多くの人民の生命を奪い去り、それがひいては國の滅亡にもつらなる、國の大事であるというのである。従って兵、つまり軍事への対応には國家としての最大の関心と注目が払われなければならない。そのことの具体的なやり方について、『孫子』では、まずつぎのことを述べている。

○故にこれを経るに五事を以てし、これを校ふるに計を以てして、其の情を索む。（故經之以五事校之以計、而索其情）『孫子』 計篇）

つまり、「五事を経」して、さらに「校」ということを成さなければならぬという。この「五事を経する」というのは、『十一家注孫子』において、杜牧が「経とは経度なり」といつているように、五つの事項について自國の軍事のありさまをはかり、その実力のほどを検討することであると、みてよいであろう。そしてそのうえで、

さらに杜牧も主張する、「校量」ということをするのである。これは七つのことがらについて、自國と敵國とどちらがすぐれているかを校（くら）べ、量（はか）ってみることであるとしてよいであろう。こうしたことをしたうえで、戦争をしたとき、どちらが勝つかということを、正確に判断しなければならないと、右に引いた『孫子』の本文では述べているのである。では、ここに自國の実力をはかる材料としてあげられている「五事」について、『孫子』のいうところについてみてみよう。

○一に曰く道、二に曰く天、三に曰く地、四に曰く將、五に曰く法なり。道とは、民をして上と意を同うし、これと死すべく、これと生くべくして危を畏れざらしむなり。天とは、陰陽・寒暑・時制なり。地とは、遠近・險易・廣狹・死生なり。將とは、智・信・仁・勇・嚴なり。法とは、曲制・官道・主用なり。凡そ此の五者は、將は聞かざること莫きも、これを知る者は勝ち、知らざる者は勝たず。（一曰道、二曰天、三曰地、四曰將、五曰法、道者令民與上同意、可與之死、可與之生、而不畏危也、天者陰陽寒暑時制也、地者遠近險易廣狹死生也、將者智信仁勇嚴也、法者曲制官道主用也、凡此五者、將莫不聞、知之者勝、不知者不勝）『孫子』 計篇）

ここに引いた文章のさいごに明らかのように、「五事」とは、それを將軍が深く知るかどうかに戦争の勝敗がかかっているとまでいわれているところの、戦いを構成する重要な事象のことであつたのである。そうしたもののうち、先ず、「道」については、つぎのようにのべられている。

○道とは、民をして上と意を同じくし、之とともに死すべく、之とともに生くべくして、危きを畏れざらしむるなり。(道者、令民與上同意、可與之死、可與之生、而不畏危也) 『孫子』 計篇)

ここでいっているように、支配者と人民とが心をつに通いあわせることが、「道」であるというのである。そのように、心が通じあうことよって右にのべるように、いかなる危険をもおそれず、死をも冒してたちむかうのである。したがって、「道」とは、上下の人々のこのような心のつながりの側面をとらえていったのである。

第二の「天」についてみてみることにする。

○天とは、陰陽、寒暑、時制なり。(天者陰陽寒暑時制也) 『孫子』 計篇)

陰陽は、本来的には、陰と陽との二つの気をいう。しかし、ここでは、そうした二気の次元にとどまることをいっているのではない。二気が相通じあい、変転しあう側面をとらえていっているのである。これと同じように、ここでいう寒暑も、四時の季節の移りかわりのなかでの、一側面をとらえて述べているとみてよい。また、時制というのも、昼夜の時の推移についての表現であると考えてよいであろう。このように考えると、これらはすべて天の下において循環し、相通じあって変化しているものである。戦争においては、これらの動きのさまざまな側面に注目し、それらを時には利用し、時には避けるというような、配慮が必要となるのである。

第三の「地」については、つぎのようである。

○地とは、遠近、險易、廣狹、死生なり。(地者、遠近險易廣狹死

『孫子』における「連続性」信仰と時間認識をめぐって(久富木成大)

生也) 『孫子』 計篇)

戦いにのぞむ土地の遠近・險易・広狭・死生^⑤のことを、ここではいう。このように表現はされているが、これらのあいだにはいずれも絶対的な区別はない。このように表現され、見なされている土地の状態は相対的なものであり、その変化の相は連続的なつながりのもとにあるのだといってよいであろう。

第四の「将」については、以下のごとくである。

○將とは、智、信、仁、勇、嚴なり。(將者、智信仁勇嚴也) 『孫子』 計篇)

これは、將軍の評価の軸となる、智慧の高低、信義の厚薄、仁心の有無、勇気の強弱、厳格さの大小についてのべているのである。それぞれの項目は、一人の將軍の人格のうちにあつて、とけあい、通じあつて、渾然一体となつているのである。しかもまた、各々の徳目にあつては、その程度は固定してはいるのではない。時と場合とによつて流動し、変化しているはずのものである。ここにある、流通の相について、我々は注目しなければならぬ。

さいごに第五、「法」についてみてみる。

○法とは、曲制、官道、主用なり。(法者、曲制、官道、主用也) 『孫子』 計篇)

ここでいう「法」は、一般にいわれている、社会規範としての法律のことではない。それは「曲制」であり、「官道」であり、「主用」である。この「曲制」については諸説がある。例えば、『十一家注孫子』に引く王皙の説「曲とは卒伍の属。制とはその行列進退を節制するなり」という説があるが、ここではこの説に依ることとする。

『孫子』における『連続性』信仰と時間認識をめぐって（久富木成大）

これによると、「曲制」とは、部隊の組織編成、およびその隊形行軍についての規律のことである。「官道」については、同じく王哲は、「官とは羣吏偏裨なり。道とは軍行の及び舎（やど）る所なり」という。張預は、同書にて、「官とは偏裨の任を分つを謂い、道とは、糧餉の路を利用するを謂う」と解釈する。これらの諸説を総合して考えると、「官道」とは、軍隊の將校や兵士の任務についての規定と、軍隊の行軍の路程や諸物資の補給路についての規律のことであると考へるべきであろう。つぎに、「主用」についてである。王哲は、「主とは、そのことを主（つかさど）り守り、用とは、凡（すべ）ての軍の用にして、輜重糧積の属を謂うなり」という。これによると、「主用」とは、軍隊の物質的な面についての供給、消費にかかわる規律のことをいっているのであると考へてよいであろう。

軍隊の、前述の「曲制」、「官道」、「主用」は、それぞれが規律ある状態から、無い状況へと、連続したかたちで存在するのであって、段階的、または断続的なあり方をするのではない。そうした連続の相のなかで、それぞれが最もよいかたちであらねばならないのである。軍隊におけるその理想的なあり方のことを、ここでは「法」といっているのである。まさにその説を引いた張預もそのことを、「六者は用兵の要、よろしく処置にその法あるべし」と強調して、この項の注解をしめくくっている。

ここまでみてきたように、これらの軍事を構成する五つの事項は、それぞれに連続したかたちで変動しうるもので、その変動のさまざまの相が実際の軍隊のすがたとしてあるわけである。このような性質の五つの項目、つまり「五事」によって、自国の軍隊の実力を「経

度」、つまり、計（はか）つてみるのである。そのうえで、『孫子』の本文では、先にのべた「校」、つまり「校量」ということをすることを主張する。これはすでに記したように、敵と味方との戦力を比較することであるのである。以下のごとくである。

○故に之を校（はか）るに計を以てし、其の情を索む。曰く、主いづれか道ある。將いづれか能ある。天地いづれか得たる。法令いづれか行はるる。兵衆いづれか強き。士卒いづれか練られたる。賞罰いづれか明かなる。吾れこれを以て勝負を知る。（故校之以計、而索其情、曰主孰有道、將孰有能、天地孰得、法令孰行、兵衆孰強、士卒孰練、賞罰孰明、吾以此知勝負矣。『孫子』計篇）

ここで「計」というのは、すでに先にもみてきたように、「計量」、つまり、他国と比較し、はかりくらべることであったのである。では、何について比較するのであろうか。ここに引用した『孫子』の文章によれば、以下のごとくである。第一に、どちらの国の君主が「道」をよりよく心得ているかどうかということである。この「道」とは、前述の「五事」の一つであるところの、支配者と被支配者が心を通いあわせる、その通いあわせ方をいう、あの「道」といった方がよい。人民が死生を忘れて、君主のために戦うようにさせる方法を心得ている君主の治める国の方が、そうでない国より、戦うにあたって強いのはうなずけるであろう。

第二には、どちらの国の將軍が能力があるかどうかの比較である。その能力とは、ここでは『十一家注孫子』における杜牧らの、「上のいわゆる智、信、仁、勇、嚴なり」という説にしたがう。

第三は、「天地」について、彼我のいずれの国が利を得ているかどうかの比較である。これについても、また『十一家注孫子』の注によつて考えることにする。そこでは、「天なるものは、さきのいわゆる陰陽、寒暑、時制なり。地なるものは、さきのいわゆる遠近、險易、広狭、死生なり」という。

第四は「法令」についての比較である。相敵対する二国のうち、どちらが法令がよく整っているか検討してみるのである。この「法令」については、一般の社会規範ととるとり方も、もちろんある。しかし、ここもやはり先の「五事」にいうところの第五、「法」、に関連させて考える方が、文章の流れとして自然であろう。つまり、軍関係における組織、行軍、補給についての規律に限定しての比較とるのである。

第五は「兵衆」、つまり軍隊の戦闘力の強弱についての比較である。ここでは、前述の「五事」の総合されたものが、その比較の対象になると考えるべきであろう。

第六は、「士卒」が、いずれの国がよく訓練ができてくるかの比較である。当然のこととして、まず、前述の「五事」における、「法」の「曲制」、つまり部隊の組織編成の効果が、比較の対象となるはずのものである。よく編成され、その編成の意向にしたがつて全軍がよく効果を発揮するかどうか、比較されるはずである。組織が確立して、そのうえではじめてその軍隊の訓練が施されるものであるからである。

第七は、「賞罰」についての比較である。この賞罰についても、一般的に、社会に行われている賞罰ととるとり方もある。しかしなが

『孫子』における「連続性」信仰と時間認識をめぐって（久富木成大）

ら、これもやはり文脈の流れのうえから、軍事にことよせて考えるべき性質のものであろう。しかもこれは先の「五事」のなかでも、第四の「将」についていわれていた、「嚴」に関連させて考えるのがよいであろう。つまり、將軍の行う刑賞の嚴格、公正さが比較されると考えるのである。

以上のべた七つの事象をもとにして、嚴密に自他の軍について比較検討する。そうして、ここに『孫子』から引いた文章の末尾にいうように、「吾れ、これを以て勝負を知る」ということになるのである。この文章の解は、一般に以下のように考えられている。

○賈林曰く、上の七事を以て彼我の政を量り校すれば、則ち勝敗みるべし。（賈林曰、以上七事量校彼我之政、則勝敗可見』十一家注孫子）

また、以下のごとき解もある。

○張預曰く、七事ともに優（すぐ）るれば、則ち未だ戦はずして先に勝つ。七事ともに劣れば、則ち未だ戦はずして先に敗る。

故に勝負は預め知るべきなり。（張預曰、七事俱優、則未戦而先勝、七事俱劣、則未戦而先敗、故勝負可預知也』『十一家注孫子』）

このように、「五事」で自国の軍の実情を十分に知り、その戦力についての深い認識を得るのである。その上で、七つの事からについて、自他の軍勢の比較を冷静におこなう。そうすれば、戦わずして、その勝敗が明白なものとなるというのである。

すでにみてきたように、勝敗の判断の基礎となった「五事」と「七計」とのあいだには、深いつながりがあるのである。そうして、あ

『孫子』における「連続性」信仰と時間認識をめぐって（久富木成大）

るいみで「七計」は「五事」の変形されたものとすることもできるのである。「五事」と「七計」とは、このように通いあう性質のものであるのである。このような視点に立つと、「五事」と「七計」とには、分ちがたく流れ、通じあっている、あるものがあるものであるということが推知される。「五事」の各々のものを通じているあるものがあり、その拡大ともとれる「七計」へと、それがまた通じているというぐあいである。この「通じている」と、つまり連続性は、勝利につながるものとして、その存在については、一種の信仰さえこめられて求められるのである。これがあれば、戦勝の予想が確固たるものとなるからである。

二 勝つこと——「勢」への信仰

戦争は人民の死生の分かれ目であり、国家の存亡をも左右する、重要な出来ごとである。したがって、歴史上、戦争は無視できない存在として、人間にとって中心的な関心事でありつづけたのである。そうして、その関心の向かっていく先はただ一つ、一にも二にも「勝つこと」であったのである。それだけに、軍事にはどこか無理を承知のうえでも、認めなければならぬものがあった。

○兵なるものは、詭道なり。故に能くして之に能くせざるを示し、用ひて之に用ひざるを示し、近くして之に遠きを示し、遠くして之に近きを示し、利して之を誘ひ、亂して之を取り、實すれば之に備へ、強ければ之を避け、怒らせて之を撓し、卑しくして之を驕らせ、佚すれば之を勞し、親めば之を離し、其の備へ

なきを攻め、その不意に出づ。これ兵家の勝、先づ傳ふべからざるなり。（兵者詭道也、故能而示之不能、用而示之不用、近而示之遠、遠而示之近、利而誘之、亂而取之、實而備之、強而避之、怒而撓之、卑而驕之、佚而勞之、親而離之、攻其無備、出其不意、此兵家之勝、不可先傳也——『孫子』 計篇）

冒頭にいう。軍事は「詭道である」と。この「詭道」について、曹操は「兵に常形なし。詭詐を以て道となす」という。李奎はまた、「軍は詐を厭はず」とも注する。このように軍事は、正面きつての正道ばかりではやってゆけないのである。その間の事情については、張預の、歴史の現実をふまえた、つぎのような解釈がある。

○張預曰く、兵を用ふるは、仁義を本にするといへども、然れども其の勝を取るは、必ず詐にあり。故に柴を曳き塵を揚ぐるは、樂枝の譎りなり。萬弩ひとしく發するは、孫臏の奇なり。千牛ともに奔るは、田單の權なり。囊沙壅水は、淮陰の詐なり。これみな詭道を用ひて勝を制するなり。（張預曰、用兵雖本於仁義、然其取勝必在詭詐、故曳柴揚塵、樂枝之譎也、萬弩齊發、孫臏之奇也、千牛俱奔、田單之權也、囊沙壅水、淮陰之詐也、此皆用詭道而制勝也——『十一家注孫子』）

このように「詭（いつわり）」であることは十分に承知しながらも、ここにあげるさまざまの手段を弄しなければならぬ。また、ことばをかえれば、このような「詭」を行うことこそが、軍事においては勝利に、高い確率でつながるのである。このような「詭道」の実例は、『孫子』の本文にあげるような一般的なものから、張預の引く事例等々、枚挙にいとまがない。

しかし、戦争の勝利は必ずしも詭道ばかりによつてもたらされるものではない。そのことは、例えば以下のごとくである。

○孫子曰く、凡そ衆を治むること、寡を治むるが如きは、分數これなり。衆を鬪はしむること、寡を鬪はしむるがときは、形名これなり。三軍の衆、必ず敵を受けて敗ることなからしむべきものは、奇正これなり。兵の加ふる所、碲を以て卵に投ずるが如きものは虚實これなり。(孫子曰、凡治衆如治寡、分數是也、鬪衆如鬪寡、形名是也、三軍之衆、可使必受敵而無敗者奇正是也、兵之所加、如以碲投卵者、虚實是也)『孫子』(勢篇)

戦争ではここにいうように「奇正」、つまり詭道による攻撃と、正攻法による攻め方とがある。この両方があつて、はじめて充実した力で、敵の虚をついて大勝利をうるができるのである。この間の事情を、例えば張預は「奇正つまびらかにして、然るのち虚実みるべし」とのべている。

戦争についての、この「奇正」の戦法については、『孫子』ではさらに以下のごとくべつづけられている。

○凡そ戦は、正を以て合ひ、奇を以て勝つ。(凡戦者、以正合、以奇勝)『孫子』(勢篇)

また以下のごとくである。

○亂は治に生じ、怯は勇に生じ、弱は彊に生ず。治亂は數なり、勇怯は勢なり、彊弱は形なり。故に善く敵を動かすものは、これに形すれば敵必ず之に従ひ、之に予ふれば敵かならずこれを取る。利を以てこれを動かし、本を以てこれを守つ。故に善く戦ふものは、これを勢に求めて、これを人に責めず。故によ

『孫子』における「連続性」信仰と時間認識をめぐつて(久富木成大)

く人を選んで、勢に任ず。勢に任ずるものの、その人を戦はしむるや、木石を轉ばすが如し。木石の性は、安ければ靜かに、危ふければ動き、方なれば止まり、圓なれば行く。故に善く人を戦はしむるの勢、圓石を千仞の山より轉ばすが如きものは、勢なり。(亂生於治、怯生於勇、弱生於彊、治亂數也、勇怯勢也、彊弱形也、故善動敵者、形之、敵必從之、予之、敵必取之、以利動之、以本待之、故善戰者、求之於勢、不責之於人、故能擇人而任勢、任勢者、其戰人也、如轉木石、木石之性、安則靜、危則動、方則止、圓則行、故善戰人之勢、如轉圓石於千仞之山者勢也)『孫子』(勢篇)

軍隊にはよく治まっているときと混乱しているときがある。また、兵士の勇氣がみなぎっているときと、怯えているときがある。さらに、軍の力が強いときと弱いときがある。しかし、このように述べられているにもかかわらず、それはみせかけのことで、実情は、多くのばあいそうではないとして、ここに注して曹操は「みな形を敗して、情を匿すなり」という。つまり、軍隊の外見は、多く「詭りであるというみかたを、曹操はとるのである。

「亂が治より生ず」、「怯が勇より生ず」、「弱が彊より生ず」と、右の引用文ではのべられているのであるが、それも実情は以下のごとくであるという。

○梅堯臣曰く、治は則ちよく偽りて亂となし、勇は則ちよく偽りて怯となし、彊は則ちよく偽りて弱となす。(梅堯臣曰、治則能偽爲亂、勇則能偽爲怯、彊則能偽爲弱)『十一家注孫子』

同じことをまた、杜牧もつぎのようにいう。

『孫子』における「連続性」信仰と時間認識をめぐって（久富木成大）

四八

○杜牧曰く、言ふところは、偽りて形を亂すことをなし、以て敵人を誘はんと欲すれば、先づ須らく至治にし、然るのちよく偽りて亂をなすなり。偽りて形を怯となし、以て敵人を伺はんと欲すれば、先づ須らく至勇にして然るのちよく偽りて怯をなすなり。偽りて形を弱となし、以て敵人を驕（あざむ）かんと欲すれば、先づ須らく至彊にして然るのちよく偽りて弱となすなり。（杜牧曰、言欲偽爲亂形以誘敵人、先須至治、然後能爲亂也、欲偽爲怯形以伺敵人、先須至勇、然後能爲怯也、欲偽弱形以驕敵人、先須至彊、然後能爲弱也。『十一家注孫子』）

さて、ここでひとまず注解者たちの意見をはなれて、ここに引いた『孫子』勢篇の本文にたしかえろ。まず、「治乱は数なり」という。この「数」とは何かということについて考えてみなければならぬ。これについては、以下のような注解がなされている。

○杜牧曰く、言ふところは行伍のおの分畫あり、部曲みな名數あり。故によく治をなし、然るのちよく偽亂をなすなり。それ偽亂をなすものは、出入ときならず、樵採縱横、万斗嚴ならず、これなり。（杜牧曰、言行伍各有分畫、部曲皆有名數、故能爲治、然後能爲亂也、夫爲亂者、出入不時、樵採縱横、万斗不嚴是也。『十一家注孫子』）

また、王哲は以下のようにいう。

○王哲はいく、治亂なるものは、數の變なり。數とは法制を謂ふなり。（王哲曰、治亂者、數之變、數謂法制。『十一家注孫子』）
こうした解を綜合すると、「数」とは、行伍・部曲などといわれる、軍律で定められている組織を、故意に乱すことであるということが

できる。しかし、「乱す」といっても、完全なかたちで乱れてしまい、統制が無くなってしまうのではない。したがって、ここでいう「乱」は、前章でふれた「五事」のなかの第五、「法」の延長上にあるのだといつても間違いないであらう。王哲の解釈など、まさにそこにふれているのだと見るべきものである。

つぎに勢篇本文の「勇怯は勢なり」というところについてみてみたい。これは、軍隊が勇敢になるのも、おどけづくのも、それは「勢」のおかげであるといっているのである。このことについて、例えば、以下のような解釈がある。

○李筌曰く、夫れ兵その勢を得れば、則ち怯なる者は勇、その勢を失へば、則ち勇なる者も怯なり。兵法には定めなく、ただ勢によりて成るなり。（李筌曰、夫兵得其勢、則怯者勇、失其勢、則勇者怯、兵法無定、惟因勢而成也。『十一家注孫子』）

さらにつぎのような説もある。

○陳暉曰く、勇者は奮速なり。怯なるものは淹緩なり。敵人、われ進まんと欲して進まざるを見れば、即ち我を以て怯なりとなし、必らず輕易の心あり。われその解情により、勢に假りて以てこれを攻む。龍且、韓信を輕んじ、鄭人、わが師を誘う、これなり。（陳暉曰、勇者、奮速也、怯者、淹緩也、敵人見我欲進不進、即以我爲怯也、必有輕易之心、我因其解情、假勢以攻之、龍且輕韓信、鄭人誘我師是也。『十一家注孫子』）

このように、いろいろな解釈があるが、結局のところ、以下のようなところに集約できるであらう。

○王哲曰く、勇怯なるものは、勢の變なり。（王哲曰、勇怯者、勢

之變』『十一家注孫子』

○張預曰く、實は勇にして偽りて以て怯を示すは、その勢によるなり。(張預曰、實勇而偽示以怯、因其勢也)『十一家注孫子』ここに明らかなように、この「勇」・「怯」ともに偽りによるものである。そうして、それら二つのうち、多くは「怯」の形態をとり、いざ攻撃というときに、今まで詐りかくしていた力が、つまり「勇」が、一気に爆發するのである。この一連の流れを称して、ここでは「勢」と呼んでいるのである。この「勢」というものが、勝利に大きくあずかる「力」であることはいうまでもない。

つぎに、「彊弱は形なり」という勢篇の本文についてみてみたい。この部分について、以下のような注釈がある。

○杜牧曰く、彊なるを以て弱となして、その形を示すをもちぬるは、匈奴の冒頓しめすの類なり。(杜牧曰、以彊爲弱、須示其形、匈奴冒頓示類也)『十一家注孫子』

この杜牧のいうところについては、つぎの説が、よくその事情を詳細に説明してくれている。

○張預曰く、實は彊にして偽りて弱を以て示すは、その形を見はすなり。漢の高祖、匈奴を撃たんと欲し、使を遣はして之を覘はしむ。匈奴その壯士肥馬を匿して、その弱兵羸畜を見せれば、使者十輩、みな撃つべしといふ。ただ婁敬のみ曰く、兩國あい攻めれば、宜しく長ずる所を矜誇すべし。今、いたずらに老弱を見はすは、必らず奇兵あらん。撃つべからざるなり、と。帝、従はず。果して白登の圍あり。(張預曰、實彊而偽示以弱、見其形也、漢高祖欲撃匈奴、遣使覘之、匈奴匿其壯士肥馬、見其弱

『孫子』における「連続性」信仰と時間認識をめぐって(久富木成丈)

兵羸畜、使者十輩皆言可撃、惟婁敬曰、兩國相攻、宜矜誇所長、今徒見老弱、必有奇兵、不可撃也、帝不従、果有白登之圍)『十一家注孫子』

この、弱そうに敵に見せることは、当然「詭り」によるものであり、意識的なものであるのである。その点は古来の注釈に強調して示されている。

○梅堯臣曰く、彊を以て弱となすは、形の羸懦を以てするなり。

(梅堯臣曰、以彊爲弱、形之以羸懦)『十一家注孫子』

○王哲曰く、彊弱者、形の變なり。(王哲曰、彊弱者、形之變)『十一家注孫子』

○何氏曰く、形勢暫變し、以て敵を誘って戦ふ。怯弱にあらざるなり。亂を示すも亂ならざるは、隊伍もと整へばなり。(何氏曰、形勢暫變、以誘敵戰、非怯弱也、示亂不亂、隊伍本整也)『十一家注孫子』

軍をいかにも弱そうに敵に印象づける工夫をして、その実、隊伍はしっかりと整え固めて、敵の攻撃に備えているのであるという。こうした、秘められた部分の態勢の固さから、真の強さが生まれ、勝利が得られるのである。

以上のべたように、「数」・「勢」・「形」はすべて詭道によるものであるが、それがよく敵を動かすものになると、「孫子」の本文ではいっているのである。「善く敵を動かすものは、之に形すれば、敵必ず之に従ひ、之に予ふれば敵必ず之を取る。利を以て之を動かす、本を以て之を待つ」といっているのがそれである。勝利につながる要因としての三つの「数」・「勢」・「形」ではあるが、実は、

『孫子』における『連続性』信仰と時間認識をめぐって（久富木成大）

これらは「勢」一つに集約される性質のものである。これは結局のところ、軍の「勢」（いきおい）というものが、つまりある種の力が、前述の三つの要因の、それぞれの根源にあると考えられるからに外ならない。ここに引いた『孫子』の本文でも、すでに見てきたように、「勢」を篇名とし、いたるところに「勢」に言及しながら述べられているのも、そのためである。

戦術にたけた人は、将兵の個人としての力をたのみにはしない。これが『孫子』の、右に引いた本文の強く主張するところである。

そうして、個々の将兵を、よくこの「勢」にのせて、彼ら個々人の力の総和以上の大きな力を発揮させるのが、戦争の上手な戦い方であるという。それは例えれば、木や石は平地に安置したのでは動かないが、これらを丸く加工したり、傾斜地に置いたりすれば、ころがり出し、次第にその速度と力とを増加するようなものである。丸い石を、千仞の谷そこへころがり落とすような「勢」いこそ、軍隊を勝利に導く「力」になるのであると、『孫子』はいう。軍隊において、このような「勢」というものがあるとすれば、それはこの章でこれまで見てきたように、軍隊を「治」・「勇」・「彊」に導くもの、見かけ上の「乱」・「怯」・「弱」のかけにあつて、しっかりと軍隊を整えている、秘められた「力」によるもの以外の、何物でもありえない。そうして、その力というものは、先に第一章でみてきたところの、軍における「五事」によって生み出されるものであることは、すでに引いて示した、この章の多くの注者たちの注の中に、すでに明らかになってきているのである。それはまた、軍をいくえにもつらぬいている、ある種の連続性によつてもたらされているものとい

うこともできよう。それが「勢」であるのである。

五〇

三 間諜——敵国との連続性の確立

戦争は相手があつて行われる出来ごとである。したがつて、当然のことながら相手国の事情を知らずには、敵国に進撃してからの有効な軍事行動をとることはできない。戦争の重大さとあいまつて、この敵国の事情を知るといふことの大切さも深く認識されるべきことであるのである。以下のごとくである。

○是の故に、諸侯の謀を知らざるものは、預め交はること能はず。山林險阻沮澤の形を知らざるものは、軍をやること能はず。卿導を用ひざるものは、地の利を得ること能はず。四五の者、一も知らざるは、霸王の兵に非るなり。夫れ霸王の兵は、大國を伐てば、その衆あつまることを得ず、威、敵に加はれば、その交り合ふことを得ず。この故に、天下の交りを争はず、天下の權を養はず、己の私をのべ、威、敵に加はる。故にその城ぬくべく、その國おとすべし。無法の賞を施し、無政の令を懸く、三軍の衆を犯すこと、一人を使ふが若し。之を犯すに事を以てし、告ぐるに言を以てすること勿れ。之を犯すに利を以てして、告ぐるに害を以てすること勿れ。之を亡地に投じて然るのち存し、之を死地に陥れて然る後生く。夫れ衆、害に陥りて、然るのち能く勝敗をなす。（是故不知諸侯之謀者、不能預交、不知山林險阻、沮澤之形者、不能行軍、不用卿導者、不能得地利、四五者不知一、非霸王之兵也、夫霸王之兵、伐大國、則其衆不得

聚、威加於敵、則其交不得合、是故不爭天下之交、不養天下之權、信己之私、威加於敵、故其城可拔、其國可墮、施無法之賞、懸無政之令、犯三軍之衆、若使一人、犯之以事、勿告以言、犯之以利、勿告以害、投之亡地、然後存、陷之死地、然後生、夫衆陷於害、然後能爲勝敗』『孫子』 九地篇)

ここに引く文章の冒頭、「諸侯の謀を知る」、「山林險阻沮澤の形を知る」、「卿導を用いることを知る」、という三つのことを主張している。そうしてこれらのうち、一つでも欠けることがあれば、もはやそれは霸王の軍のことではないとまで強調する。そして、その軍がいかにも優秀であり、前章でみてきたところの、「勢」をその軍がそなえていても、ここにいう三者の一つでも欠けたものがあるならば、その軍は、最後の勝利を手にはできないのである。では、「勢」や、ここにいう三者のみで、もう勝利は決定的となるのであろうか。『孫子』ののべるところを見てみたい。

○夫れ兵の事たる、敵の意を順詳するにあり、敵を一向に并せて千里に將を殺す。これを巧にして能く事を成すと謂ふ。(夫爲兵之事、在於順詳敵之意、并敵一向千里殺將、此謂巧能成事者也
『孫子』 九地篇)

このように、戦争にあたっては、敵がどのような心を持っているのか、つまり敵軍の進退の心づもりを、十分に把握したうえで敵地に入らねばならないという。敵の行動の心づもり、つまり敵の心の中を、前もって知らなければならぬという。したがって、外にあらわれない、形をとらないものを、つかまなければならぬわけである。そのため、目に見えるもの、例えば敵地の地形山川などに

『孫子』における『連続性』信仰と時間認識をめぐって(久富木成大)

いては、前もって知り尽すことは当然のことであるとして、ここでは特に言及しないのである。

このように、戦勝をおさめるためには、敵地を知り、あわせて敵の心のうちをも可能な限り把握しておくことが必須のことであるのである。このことの大切さと、その理由を、『孫子』は、さらに以下のように述べている。

○孫子曰く、凡そ師を興すこと十萬、出でて征すること千里、百姓の費、公家の奉、日に千金を費し、内外騒動し、道路に怠りて、事を操ることを得ざるもの、七十萬家、相守ること數年、以て一日の勝を争ふ。而るに爵祿百金を愛んで敵の情を知らざるは、不仁の至りなり。人の將に非るなり。主の佐に非るなり。勝の主に非るなり。故に名君賢將の、動いて人に勝ち、功を成すこと衆に出づるゆえゑんは、先づ知ればなり。先づ知ること、は、鬼神に取るべからず、事に象るべからず、度に驗するべからず、必ず人に取って敵の情を知るものなり。(孫子曰、凡興師十萬、出征千里、百姓之費、公家之奉、日費千金、内外騒動、怠於道路、不得操事者、七十萬家、相守數年、以争一日之勝、而愛爵祿百金、不知敵之情者、不仁之至也、非人之將也、非主之佐也、非勝之主也、故名君賢將、所以動而勝人、成功出於衆者先知也、先知者不可取於鬼神、不可象於事、不可驗於度、必取於人、知敵之情者也』『孫子』 用間篇)

ここに『孫子』は、戦争の重大さを、経済の面から新たに明らかにすることから、はなしをはじめている。その例として、十万の兵士からなる軍隊を組織して、千里の彼方に出撃する場合のことを話

『孫子』における『連続性』信仰と時間認識をめぐって（久富木成大）

題とする。そうすると、人民や政府の出費が、一日に千金にもなる。さらに自国のみならず、敵国をもあわせて、戦争にまきこまれてしまい、農業など、生業に従事出来なくなった人々の家が七十万戸も出るしまつである。このような状態で、膠着状態に入り、数年間も相対峙するようになることも珍らしいことではない。経済面からする軍事の重大さは、はかり知れないものがある。

以上にのべたような、経済的出費を最大限に減らす努力をするのは、君主、將軍の最も心をくだかねばならないことである。この心くばりを怠り、民衆にも多大の苦しみを与えつづける支配者は、ここに引いた文章に明白にのべられているように、「不仁の至り」として強い批難を受けなければならない。このように、戦争を最も早く、しかも勝利のうちに終らせる努力は、支配者にとって絶対に欠かさない。こうした見地から、支配者の大きな怠慢として、右の引用文では「敵の情を知らないこと」ということをあげている。このことについては、以下のような注釈がある。

○李筌曰く、爵賞を惜しみ、間諜に與へて敵の動靜を窺はしめず。

これを不仁の至りとなすなり。（李筌曰、惜爵賞不與間諜、令窺敵之動靜、是爲不仁之至也。『十一家注孫子』）

間諜に爵位や賞金を十分に与えて、敵の動靜をうかがわせ、その情報を利用することこそ、戦勝に不可欠のことであるという。この間諜、つまりスパイの使い方が、時の支配者にはわかっているまいと『孫子』はいう。スパイにはいくら高給を与えても、与えすぎることはない。なぜなら、そのもたらす情報を有効に使うことによつて、戦争をより早く、勝利のうちに終結させることができるからである

と、『孫子』には記されているのである。

迅速に戦勝をかくとくしたことによつて、明君・賢將の名を得た人々が、そのような衆にぬきん出た成功を取めることのできた第一の理由を、『孫子』は、いちはやく「敵の実情」に通じたからであるという。このような役わりをする「敵の実情」を、出陣ないしは戦關に先立って知る手段、ないし道はただ一つしか無いと、『孫子』は強調する。それは鬼神の助けによつて得られるのではないと、まず明言する。このことについて、以下のような注釈がある。

○張預曰く、これを視れども見えず、これを聴けども聞こえざれば、以て禱祀して、しかも取るべからざるなり。（張預曰、視之不見、聴之不聞、不可以禱祀而取。『十一家注孫子』）

こうした情報は、遠隔の地に関するものであり、これを得たい者からすれば、見聞をはるかに超越した場所にあり、自らと断絶した關係にそれら情報はおかれているのである。したがつて、宗教的な力にすがつてそれを得たいのが人情であるが、それではだめである」と、『孫子』は断定する。このように、情報収集の手段をめぐつて、第一に宗教的なものを否定する。第二には、それは類推によつて得られるものでもないという。これについての注解者の意見は、つぎのとおりである。

○杜牧曰く、象とは類なり。他事を以て比類して求むべからざるなり。（杜牧曰、象者、類也、言不可以他事比類而求。『十一家注孫子』）

第三に、情報収集に関して、『孫子』は「度に験すべからず」という。これについては、以下のような解釈がある。

○李筌曰く、度は數なり。夫れ長短闊狭、遠近小大は、即ちこれを度數に驗すべし。人の情偽は、度して知ること能はざるなり。
 (李筌曰、度、數也、夫長短闊狭、遠近小大、即可驗之於度數、人之情偽、度不能知也) 『十一家注孫子』

人の情偽、つまり人の心の真偽は、數をもつて計測して判断することはできないものである。敵国の実情も、それに似ていると、『孫子』はいうのである。

世の常のことは、宗教的なものに依拠したり、類推によつたり、計測したりして知ることが多い。しかし、戦争をめぐつての敵国の情報、こうした手段を拒否する。敵の内実に通じ、それを利用して戦争を有利に戦うための唯一の手段は、「必らず人に取られて、敵の情を知るものなり」と、『孫子』は主張する。ところで、この「人」についてであるが、これについては、以下のような注釈にしたがうべきであろう。

○梅堯臣曰く、鬼神の情は卜筮を以て知るべく、形氣の物は象類を以て求むべく、天地の理は度數を以て驗すべし。ただ敵の情は、必らず問者によりて後、知るなり。(梅堯臣曰、鬼神之情、可以卜筮知、形氣之物、可以象類求、天地之理、可以度數驗、唯敵之情、必由問者而後知也) 『十一家注孫子』

さきに「敵の情」は、「必らず人に取る」とあつたが、その「人」とは、ここにいうように、「問者」、つまり「スパイ」のことであるのである。こうしたスパイについて、いろいろな種類があるとして、『孫子』では、以下のような例をあげる。

○故に間を用ふるに五あり。因問あり、内問あり、反問あり、死

『孫子』における「連続性」信仰と時間認識をめぐって(久富木成大)

問あり、生問あり。五問ともに起りて其の道を知るなし。これを神紀となす。人君の寶なり。卿間はその卿人に因りて之を用ふ。内間はその官人に因りて之を用ふ。反間は其の敵の間に因りて之を用ふ。死間は、誣事を外になして、吾が間をして之を知りて敵に傳へしむるなり。生間は反りて報するなり。(故用間有五、有因問、有内問、有反問、有死問、有生問、五問俱起、莫知其道、是爲神紀、人君之寶也、卿間者、因其卿人而用之、内問者、因其官人而用之、反問者、因其敵間而用之、死問者、爲誣事於外、令吾間知之、而傳於敵、生問者、反報也) 『孫子』用間篇

スパイには、「因問」つまり「卿間」¹³、「内問」、「反問」、「死問」、「生問」の五種がある。これら五種のスパイが縦横に敵国の中を往來して、相当に細密なスパイ網が張りめぐらされることになるのである。しかしながら、そのスパイ網については、ここにもいうように、「其の道を知るなし」という。つまり、誰もスパイの行動を知るものはいないのであるとべている。そうして、ここに「人君の宝なり」といつているように、神秘的な、実態のわからないスパイ網も、人君のみはそれに熟知して、それを操っているとすることがあるのである。こうして、目に見えないスパイ網が、自国と敵国とのあいだに、しっかりと張りわたされ、それによつて、両国は、あるいみで連続させられていることになるのである。

五種のスパイのかなめとなり、最も大きな働きをするのは反問である。その事情および用い方は、以下のごとくである。

○必ず敵人の間の來りて我を問するものを索めて、因りてこれを

『孫子』における『連続性』信仰と時間認識をめぐって（久富木成夫）

利し、導きて之を舍す。故に反間、得て使ふべきなり。是に因りて之を知る。故に卿間、内間、得て使ふべきなり。是に因りて之を知る。故に死間、誑事をなして敵に告げしむべし。是によりて之を知る。故に生間、期の如くならしむべし。五間のことは、主ならずこれを知る。之を知ること、必ず反間にあり。故に反間を厚くせざるべからざるなり。（必索敵人之間來間我者因而利之、導而舍之、故反間可得而使也、因是而知之、故卿間、内間、可得而使也、因是而知之、故死間爲誑事、可使告敵、因是而知之、故生間可使如期、五間之事、主必知之、知之必在於反間、故反間不可不厚也。『孫子』 用間篇）

反間とは、敵方のスパイを買収して、逆に自国に情報を提供させるようにするのである。反間は、本来、敵の人間である以上、そのもたらす情報は、敵方の事情をこちらにつつぬけにするものである。しかも、この情報にもとづいて、卿間や内間をさらにこちらの思いどおりに動かすことができる。しかも、死間を使って敵方をかき乱すことも可能となる。反間のもたらす情報によって、このように敵方をまるで自軍の軍を操るように、扱うことが可能となるのである。このように、反間は、スパイのなかでも、きわ立ってその重要度が高いのである。そのことを『孫子』も、「五間の事は、主かならずこれを知る。これを知ること、必ず反間にあり、故に反間を厚くせざるべからざるなり」といい、反間の重要さを特記する。注解の筆者たちの意見も同様である。

○杜牧曰く、卿間、内間、死間、生間、四間なるものは、皆、反間によりて敵情を知りて能くこれを用ふ。故に反間もつとも切

五四

なれば、厚くせざるべからざるなり。（杜牧曰く、卿間、内間、死間、生間、四間者、皆因反間知敵情而能用之、故反間最切、不可不厚也。『十一家注孫子』）

○杜佑曰く、人主まさに五間の用を知り、其の祿を厚くし、其の財を豊かにすべし。しかるに反間なるものは、また五間の本、事の要なり。故にまさに厚待にあるべし。（杜佑曰く、人主當知五間之用、厚其祿、豐其財、而反間者、又五間之本、事之要也、故當在厚待。『十一家注孫子』）

○梅堯臣曰く、五間の始めは、皆、反間に因縁す。故にまさに厚くこれを選すべし。（梅堯臣曰く、五間之始、皆因縁於反間、故當厚遇之。『十一家注孫子』）

○張預曰く、人主はまさに五間を用ひて以て敵情を知るべし。然れども五間は皆、反間に因りて用ひらるれば、則ちこの反間なるもの、豈にこれを厚待せざるべけんや。（張預曰く、人主當用五間以知敵情、然五間皆因反間而用、則是反間者、豈可不厚待之耶。『十一家注孫子』）

敵国の正確な実情を得ることは、軍事においてかけがえない大切なことである。このことについては、この章の冒頭に引いた『孫子』のいうところによって、すでに明らかである。しかし、敵国の実情は、鬼神の力、類推、計量などの、通常のものごとを知る手段によっては知ることのできないものである。その意味において、自国と敵国とのあいだには、断絶によってへだてられた大きな境界があるのだということができよう。しかし、この境界をやぶる、一気に敵国を自国につなげてくれるのが、反間をかなめとする

スパイたちの働きである。敵国を変じて自国に変せしめるのが戦勝というものであるとすれば、その変化の媒介となるものこそ、スパイである。スパイの働きが、戦勝のなかの要因で、特筆される理由も、その点を見ぬいてである。したがって、夏の天下が殷のものとなった理由、その殷がまた周のものとなった事情を、『孫子』はつぎのようにいう。

○昔、殷の興るや、伊摯夏に在り。周の興るや、呂牙殷に在り。

故にただ明君賢將の、よく上智を以て間となすものの必らず大功を成す。此れ兵の要、三軍の恃みて動く所なり。(昔殷之興也、伊摯在夏、周之興也、呂牙在殷、故惟明君賢將、能以上智爲間者、必成大功、此兵之要、三軍之所恃而動也) 『孫子』 用間

この伊摯、つまり伊尹、呂牙すなわち呂望について、以下のような注がある。

○張預曰く、伊尹は夏の臣なり。後に殷に歸す。呂望は殷の臣なり。後に周に歸す。伊、呂湯武をたすけ、兵を以て天下を定めしは、天に順ひて人に應ぜしなり。伯州犂の楚に奔り、苗賁皇の晉にゆき、狐庸の呉にあり、士會の秦に居るとは同じきにあらざるなり。(張預曰、伊尹、夏臣也、後歸于殷、呂望、殷臣也、後歸于周、伊呂相湯武、以兵定天下者、順乎天而應乎人也、非同伯州犂之奔楚、苗賁皇之適晉、狐庸之在呉、士會之居秦也)

『十一家注孫子』

伊尹や呂望が間者であったかどうかは速断はできない。ましてや反問であったかどうかは判断がわかれるであろう。しかし、『孫子』では間者として位置づけており、夏を殷に、殷を周に変えた戦争で

『孫子』における『連続性』信仰と時間認識をめぐって(久富木成大)

の、伊尹、呂望、二人の役わりの重大さを、ここに記しているのである。

四 戦争と時間表象

『孫子』においては、その書の性質上当然のこととして、戦争のさまざまな側面について言及している。そこにえがかれた状況は多様であるが、おのずからある種の類型的なものがあるようにも思われる。ここではそれらのなかからいくつかを選び、分類して示してみることとする。

(1) 無形と流れと方向性

軍および軍の戦闘行為を、水になぞらえて描写することが、『孫子』のなかではおこなわれている。例えば、以下にのべるようなかたちにおいてである。

○故に兵に形するの極は、形なきに至る。形なければ深間も窺ふこと能はず。智者も謀ること能はず。形に因りて勝を衆に措く。衆、知ること能はず。人、みな我が勝つゆえんの形を知りて、わが勝を制する所以の形を知るなし。故にその戦勝ふたびせずして形に無窮に應ず。(故形兵之極、至於無形、無形則深間不能窺、智者不能謀、因形而措勝於衆、衆不能知、人皆知我所以勝之形、而莫知吾所以制勝之形、故其戦勝不復、而應形於無窮)

『孫子』 虚實篇

この記述において、二つのことに注目したい。一つは軍の形の無形ということである。もう一つは、戦勝のあり方は、相手の出方し

『孫子』における「連続性」信仰と時間認識をめぐって（久富木成大）

だいで、ほとんど無限であるということである。ここから我々は、「無形」ということと、同じ形をくりかえさないということからする、物の刻々の変化、あともどりのない、したがって、ある種の「方向性」とを読みとることができる。戦勝へとつき進む軍隊の、「この「無形」と「方向性」とに関連して、『孫子』では、さらに以下のような記述がある。

○夫れ兵の形は水に象る。水の形は高きをさけて下に趨き、兵の形は實を避けて虚を撃つ。水は地に因りて流れを制し、兵は敵に因りて勝を制す。故に兵は常の勢なく、水は常の形なし。よく敵に因りて變化して勝を取るもの、これを神と謂ふ。故に五行に常の勝なく、四時に常の位なく、日に短長あり、月に死生あり。（夫兵形象水、水之形、避高而趨下、兵之形、避實而擊虚、水因地而制流、兵因敵而制勝、故兵無常勢、水無常形、能因敵變化、而取勝者、謂之神、故五行無常勝、四時無常位、日有短長、月有死生。『孫子』 虚實篇）

水には形がない。又、つぎのような方向性がある。つまり、高い所から低いところへと流れる。そうして、一般にはその逆にむかうことはない。水のこのような性質になぞらえて、軍の戦勝のあり方をここでは「よく敵に因りて變化して勝を取るもの、これを神という」と表現し、その神妙さをたたえている。

□連続性

前項でみてきたとおり、軍が水にたとえられる以上、軍の行動に水の流れからくるところの連続性があるということについては、すでにそれを前提としているはずである。ここではさらに、そのこと

についての以下のような明確な記述に注目したい。

○故によく兵を用ふるものは、譬へば率然の如し。率然とは、常山の蛇なり。その首を撃てば尾いたり、その尾を撃てば首いたり、その中を撃てば首尾ともに至る。敢て問ふ、兵は率然の如くならしむべきか。曰く可なり。夫れ呉人と越人とは相惡むなり。その舟を同じくして濟りて風に遇ふに當りては、その相救ふや左右の手の如し。この故に馬をならべ輪を埋むるも、未だ恃むに足らざるなり。勇をととのへて一の若きは、政の道なり。剛柔みな得るは、地の理なり。故によく兵を用ふるものは、手を攜へて、一人を使ふが若くなるは、已むを得ざればなり。（故善用兵者、譬如率然、率然者、常山之蛇也、擊其首則尾至、擊其尾則首至、擊其中則首尾俱至、敢問、兵可使如率然乎、曰、可、夫呉人與越人相惡也、當其同舟而濟遇風、其相救也、如左右手、是故方馬埋輪、未足恃也、齊勇若一、政之道也、剛柔皆得、地之理也、故善用兵者、攜手若使一人、不得已也。『孫子』 九地篇）

『率然』というのは、常山にいる蛇の名である。この蛇が特に有名であるのは、他の蛇にくらべて、活発な動き方をするというところにあるのであろう。蛇の動きは、一般には、それほどすばやくはない。しかし、この常山の蛇は頭、体、尾の動きが異常に鋭敏であり、そのうえ、体の各部の連繋が密で、一体化が著るしいとされており、そうしたことで名を得ているものようである。

士卒がこの「率然」のように、一体化した動きができるものかどうか、戦勝においては欠かせないことである。右に『孫子』から

引いた文章においては、それが可能かどうかが問われている。その答えは、可であるという。たとえば、仇敵である呉人と越人とが同じ舟に乗りあわせたとする。その舟が、もし嵐にあつて沈みそうになるようなことがあれば、呉人と越人は力をあわせて舟の沈没を防ぐであろう。そうしたおりに、両国の人々は憎しみを忘れて、あたかも一人の人物の左右の手のごとく、よく一体化して、人力の限りを尽すのである。士卒を、ここにのべた呉や越の人々のように、決死の状況におくことが、軍の中で彼らを一体化させるための必須の条件であると、『孫子』はいう。そのような苛酷な立場におかれれば、必ず、「手を攜うるが若くして一になる」という。軍全体がみごとに一体化するということである。兵士たちをこのように一体化させるのが、「善く兵を用うる」ことであり、このような状態になったとき、勝利が得られるのであると『孫子』はいう。

一体化するということは、ある側面から見れば、切れ目がないうことでもある。軍隊の力を「水」にたとえるみかたを、すでに前項においてみてきたのであるが、軍隊が一体化するということは、以下のようなあり方をするのである。つまり、「率然」のようになることである。軍隊に即していえば、「兵士たちが、手を攜える」とであり、そうなることによって軍隊全体の、すみからすみまで神経がゆきとどいたような状態になる。そうなると、その軍の動きはどこにおりなく、まるで流れる水のようにであるであろう。そこではじめて軍隊の力が完全に発揮され、勝利がもたらされるのである。軍隊における戦勝が、その「連続性」によつてもたらされることを、『孫子』は、このようなかたちで述べている。

『孫子』における『連続性』信仰と時間認識をめぐって（久富木成大）

(イ) 循環性

軍隊がその機能と能力を十分に発揮し、活動する状態には、また「循環」の相がみられることを、『孫子』は指摘する。以下のごとくである。

○凡そ戦ひは、正を以て合ひ、奇を以て勝つ。故に善く奇を出すものは窮りなきこと天地の如く、竭きざること江海の如し。終りて復た始まるは、日月これなり。死して更に生ずるは、四時これなり。聲は五にすぎず、五聲の變は、勝けて聴くべからざるなり。色は五にすぎず、五色の變はあけて観るべからざるなり。味は五に過ぎず、五味の變は、あけて嘗むべからざるなり。戦勢は奇正にすぎず、奇正の變は、あけて窮むべからざるなり。奇正相生すること、循環の端なきが如し。たれかよくこれを窮めんや。(凡戦者、以正合、以奇勝、故善出奇者、無窮如天地、不竭如江海、終而復始、日月是也、死而更生、四時是也、聲不過五、五聲之變、不可勝聴也、色不過五、五色之變、不可勝觀也、味不過五、五味之變、不可勝嘗也、戰勢不過奇正、奇正之變、不可勝窮也、奇正相生、如循環之無端、孰能窮之)『孫子』 勢篇)

戦勝は、正攻法と奇襲攻撃のくみあわせによつてもたらされるといふことは、すでに前章において見てきたごとくである。ことに注目すべきは、その奇襲攻撃の多彩さである。ここに『孫子』から引いた文章にもいうように、それはほとんど天地の変化の窮りなきを思わせ、長江や黄河の流れのように無尽蔵であるかの感をあたえる。そしてまた、「終りては復た始まる日や月」のようでもあるし、「死

『孫子』における『連続性』信仰と時間認識をめぐって（久富木成大）

して更に生ずる四季」の盛衰にも、それは似ている。奇襲攻撃それ自体、このように数かぎりなく、多くの形態をとり、変化の相を示すものである。

以上のべたような変化きわまらない奇襲攻撃と、正攻法の組みあわせとなると、それは『孫子』も「奇正の変は、あけて窮むべからず。奇正あい生ずること、循環の端（はし）無きが如し」と述べるように、無限としかいいようのないような数の多さである。そのあまりの多さから、多彩な攻撃の変化には、ここに『孫子』も指摘するように常に無限の循環の相が髣髴とするというのである。

（二）速さ

すでに第二章において、「勢」については言及したのであるが、ここでは、その属性について、少しばかりつけ加えておくことにする。善く戦うものには、ある種の勢いがあると『孫子』はいう。その勢いによって、その軍隊は勝利を得るのである。そのことについて、『孫子』はつぎのように述べている。

○激水の疾き、石を漂はすに至るものは勢ひなり。鷲鳥の疾き、毀折するに至るものは節なり。是の故に善く戦ふものは、その勢ひ險に、その節短し。勢ひは弩を彊（は）るがごとく、節は機を發するが如し。（激水之疾、至於漂石者勢也、鷲鳥之疾、至於毀折者節也、是故善戰者、其勢險、其節短、勢如彊弩、節如發機。『孫子』 勢篇）

勝利をおさめる軍隊の持つ独特の勢いを、『孫子』は、激水の「疾（はや）さ」と、鷲鳥、つまり猛禽の羽根の動きの「疾さ」とで解明する。つまり強い力の根源には、速さが存在するのであると考え

るのである。そのため、『孫子』は「善く戦うものは、その勢い險なり」という。この「險」については、以下のような解がある。

○曹操、李筌曰く、險はなほ疾のごとし。（曹操、李筌曰、險、猶疾也。『十一家注孫子』）

軍隊の強い攻撃力も、またその攻撃の速さに由来しているというのである。

おわりに

勝利をおさめる軍隊の戦闘には、ある種の「連続性」、「方向性」、「循環性」、「速さ」というようなものが、その属性として目立っていると、『孫子』ではいう。これらのことは戦闘にのみ、実は限定されるのではなく、『孫子』ののべる、軍事にかかわる万般のものごとにも、共通してあらわれているのである。そうして、それらは、「連続性」というところに、あるいみで集約されるようなところがあり、『孫子』の書の記述も、その点で目立っている。そのため、そこには一種の「連続性」への信仰とでもいうようなものが、色こくこめられているように思われてならない。

軍事一般にかかわる「連続性」への信仰は、それと深く関連しつつ、戦闘場面においては、あるいはまた実戦の側面では、「速さ」、つまり時間性への信仰へと、その姿をかえている。しかしこれらは、実は同じものの、別の側面にすぎないのである。そうしてまた、ここに至って、さきの「連続性」への信仰も、強く「時間性」に連関したものであったことを暗示してくれてもいる。軍事百般の集約さ

れる戦闘場面にこそ、その本質があらわれるものであろう。『孫子』は、それについて、以下のようにいう。

○兵の情は、速かなるを主とす。(兵之情主速)『孫子』九地篇
 戦勝の本質は「速さ」であると、『孫子』はいう。ここにおいて、「時間」ということが、はっきりと、戦争と本質的にむすびついたものであることを明白にしているのである。そのため、戦闘の望ましいあり方を、以下のごとく描写する。

○この故に、始めは處女の如く、敵人、戸を開く。後は脱兎の如く、敵、拒ぐに及ばず。(是故始如處女、敵人開戸、後如脱兎、敵不及拒)『孫子』九地篇

戦争は、「速く」行動するというのが、その生命であると、『孫子』の右の主張を理解していいであらう。同様のことを、『孫子』には、以下のようにもいう。

○故に兵は勝つを貴んで、久しきを貴ばず。故に兵を知るの將は、民の司命、國家安危の主なり。(故兵貴勝 不貴久、故知兵之將、民之司命、國家安危之主也)『孫子』九地篇

軍事では、「久しい」、つまり長びくことは絶対の禁物である。この「久しいこと」の害悪を知り、その対極にある「速(すみやか)さ」を実現できる人物こそ、人民の生死、國家存亡のかぎをにぎる人物であると、『孫子』はいう。

「速やかさ」は「力」である。このことは、すでに第四章でみてきたことである。そこでは、水の属性を軍事になぞらえていたのであるが、あれは結局のところ、水と軍事とをともにした、時間の構造の認識を述べたのであったのである。軍の動きの一つの側面であ

『孫子』における「連続性」信仰と時間認識をめぐって(久富木成大)

る「速やかさ」の価値を真に知る將にして、『孫子』のいうこの「民の司命」・「國家安危の主」こそは、時間の構造を、「方向性」をもち、循環しながら連続するもの」と見ぬいた人である。そうして、軍隊に、この時間の属性の一つ、「速さ」を獲得させるとき、はじめて大きな攻撃力——勝利を実現するような——になり、それがひいては発展の「方向」をとりつつ「循環」し、さらに「連続」の時間性を、國家および人民に与えるのであるということを発見した人として、位置づけているのである。

注

- ① 民之生死兆於此、則國之存亡見於彼。
- ② 宋の人。字は公立。
- ③ 死地、生地のこと。死地については「九地篇」に「疾戦則存、不疾戦則亡者、爲死地」とある。戦ってきりぬけるほか、死滅をまぬかれる道のないような土地のこと。つまり、非常に条件のわるい土地のことである。
- 生地については、単独の表現は『孫子』にはないが、例えば「死生之地」というかたちで、「形之而知死生之地」——虚實篇のように表わされている。ここでいう「生地」は、味方が絶対に敗れることのない、安全堅固な土地ということである。
- ④ 王皙曰、曲者卒伍之屬、制者節制其行列進退。
- ⑤ 官者羣吏偏裨也、道者軍行及所舍也。
- ⑥ 張預曰、官謂分偏裨之任、道謂利糧餉之路。
- ⑦ 主者主守其事、用者凡軍之用、謂輕重糧積之屬。
- ⑧ 六者用兵之要、宜處置有其法。
- ⑨ 「道」については、一般的なみで、「道德」と解するものも多い。例えば、「曹操曰、道德智能」——「十一家注孫子」のごとくである。

『孫子』における『連続性』信仰と時間認識をめぐって（久富木成大）

⑩例えば、以下の如くである。

張預曰、先校二國之君、誰有恩信之道、即上所謂令民與上同意者之道也。『十一家注孫子』

⑪杜牧曰、將孰有能者、上所謂智、信、仁、勇、嚴也。『十一家注孫子』。

⑫杜牧曰、天者、上所謂陰陽、寒暑、時制也、地者、上所謂遠近、險易、廣狹、死生也。『十一家注孫子』。

⑬曹操曰、設而不犯、犯而必誅。杜牧曰、縣法設禁、貴賤如一。魏絳戮僕、曹公斷髮是也。『十一家注孫子』。

⑭杜牧曰、賞不僭、刑不濫。梅堯臣曰、賞有功、罰有罪。『十一家注孫子』。

⑮『十一家注孫子』。

⑯『十一家注孫子』。

⑰曹操曰、皆殷形匿情也。『十一家注孫子』。

⑱『管子』小匡篇に「卿有行伍」とあり、ここに注して『管子纂話』では「古法五人爲伍、二十五人爲行」という。

また、『漢書』李廣傳には「廣行無部曲行陳」とある。ここの顔師古の注は、「續漢書百官志云、將軍領軍皆有部曲」という。

⑲張預曰、此五間之名、因問當爲卿間、故下文云、卿間可得而使。『十一家注孫子』。

⑳張預曰、率猶速也、擊之則速然相應。此喻陳法也。八陳圖曰、以後爲前、以前爲後、四頭八尾、觸處爲首、敵衝其中、首尾俱救。『十一家注孫子』。